

今日の説教のタイトルは「ひとりでいることの恵み」です。今年は春夏とコロナ禍にあって以前のようにみんな教会に集まって賛美したり、祈りあったりすることが自由に出来ない状態が続いております。また生活の様々な場面に影響が出ております。こういう時だからこそ求められているのは一人一人がキリストとしっかりと結びついた信仰者となることではないかと思えます。

様々な領域で自粛が求められていますので一人でいる時間が割合多くなっている方が多いのではと思います。ただ信仰者にとって一人でいることは孤独でいることではありません。クリスチャンが一人でいるというのは主との交わりの時を深く持てるということにもなります。先日も教会の湯山兄弟と話をしていたしまして「最近では聖書を読みたくて仕方が無いんです」とおっしゃったのが印象に残りました。今、私たちが受けているコロナ禍という試練は私たちを苦しめるものではなく、私たちをさらに神様に近づけるもの、主イエスのご臨在をさらに強く思わせる機会ともなりうると思われています。

今日取り上げました箇所ではイエス様が一人になられました。しかしそこには父なる神様との交わりを豊かに持てているという「ひとりでいることの恵み」が記されています。そのことを一緒に学んでゆきたいと思えます。

さてマルコによる福音書に繰り返し出てくる言葉があります。マルコでは 60 回以上使われています。たとえば、マルコ 1:20 では「すぐに、イエスがご呼びになった。」、マルコ 1:21 「それから、一行はカナナウムに入った。そしてすぐに、イエスは安息日に会堂に入って教えられた。」、マルコ 1:29 「イエスは会堂を出るとすぐに、ヤコブとヨハネを連れて、シモンとアンデレの家に入られた。」などです。そうです、それは「すぐに」という言葉です。そのことばは、イエスが忙しくて休む間もなく次々と精力的に働いておられる様子、父なる神から与えられた使命を果たしておられる様子を表しています。

ところが、きょうの箇所では、イエスが、人々から離れ、弟子たちをも置いて、ただひとり神の前に出ておられたことが書かれています。それも何の躊躇もなく一人になることを選んでおられるのです。ルカ福音書の同じ箇所を見ると、「群衆は、イエスを探しまわって、みもとに来ると、イエスが自分たちから離れて行かないように引き止めておこうとした。」ルカ 4:42 とあります。それに対して主イエスは「・・・福音を宣べ伝えなければなりません。わたしはそのために遣わされたのですから」ルカ 4:43 と応答されます。主イエスははっきりと自分自身の将来を父なる神様への祈りの中での導きに確信をもっておられます。このことから2つのことを教えられます。一つは私たちがもし自分自身は何者であるのか、また何のために生かされているのか分かっていないと他の人が望むように私の生き方を変えようとするということです。それからもう一つはイエスの、あの精力的な働きの方の源は、神の前に「ひとりになる」ことにあったということです。どんなに忙しくても、ひとり父なる神に熱き祈りを捧げることを通して力を得られていたのです。もし、わたしたちが、神のためにより良く働きたい、イエスのように自分の人生に与えられた使命を果たしたいと願うなら、「ひとりになる」訓練が必要です。言い換えれば、「ひとりになる」訓練ができていない人は、決して、神からの使命を果たすことができないということです。

牧師であり、神学者のボンフェッファーは「交わりの生活」において「一人でいることの出来ない人は交わりを用心しなさい。そのような人は、自分自身と交わりとを、ただ傷つけるだけである。」と言います。つまり、一人でいることに耐えられなくて、人との交わり入るならほとんどの場合、その交わりに幻滅してますます孤独感を深めることになるということです。そして多くの場合、その原因が自分にあるにもかかわらずその交わりにあるかのごとく言うということです。

「ひとりでいること」について聖書の民、ユダヤの人々は牧畜民族であり、こどものころから「ひとりになる」ことを教えられました。羊を飼うのは、その家の中で一番年若い者の仕事で、人々は少年のころ

から、ひとりで羊を追って、草のあるところを歩きまわりました。遠くまで行ったときはそこで野宿しました。たったひとりで、何もない、何も聞こえない荒野で夜を過ごすのです。いや、「何もない、何も聞こえない」どころか、羊を狙う野の獣がいて、そのうなり声が聞こえたことでしょう。しかし、ユダヤの少年たちは、野の獣を退治する方法や、非常の場合、羊をほふって食糧にすることなどを教えられていました。ひとりで生きていくことを教えられ、神の前にひとりで立つことを教えられました。

そのことと比べて現代さまざまな便利なもの、豊かなものに取り囲まれ、大勢の人々の中で生きているわたしたちは、神の言葉を聞く感覚を失い、信仰によって歩む世界の素晴らしさを味わえなくなっているのではないかと思うことがあります。神に出会い、神の言葉を聞くことができないためたましいが空っぽになっています。それを人とのまじわりで満たそうとするため、人との関わりに執着し、縛られてしまっているのではないかとも思います。人とのまじわりは大切です。しかし、それを神への信頼と同じかそれ以上のものであるかのようにし、それに依存するようになると、信仰の芽はしぼんでしまうのです。アメリカで有名な牧師であるチャック・スインドールは「確信を持たない人は自分を忙しくしていないと不安になる。そういう人は自分のことを良く言ってくれる人の歓心を引き続けなければならない」と言っています。多くの方は、神の言葉によってでなく、人々の評判によって自分を支えようとしています。神の目に映る自分ではなく、人の目に映る自分を見て、自分を支えようとするのです。ほとんどの場合、無意識なのですが、神を喜ばせるためや人の役に立つため、また、自分自身を高めるためというよりは、人々に自分を認めてもらうことのために、大きなエネルギーを費やしています。そのために疲れ果ててしまい、神を見失い、自分を見失ってしまうということになりがちです。

現代は、どの国の、どの世代でも、人と人とのつながりが強調されます。若い人たちは朝起きたときから寝るまで携帯電話をいじっています。誰かとつながっているためです。人とのつながりは大切です。交わりもコミュニティ（集まり）も大切です。しかし、それが神とのまじわりの妨げになり、一種の中毒になっているのも否めない事実です。だんだんと「キリストよりも、教会という人の集まりもしくは誰々というリーダーに期待する」ということが起こってくるのです。今が、このような時代だからこそ、わたしたちは「ひとりになること」をもっと大切にし、その訓練を受けたいと思います。

「ひとりになること」の3つの祝福について話したいと思います。

第一に、「ひとりになる」ことによって、神に自分を点検していただけます。わたしたちは、神に対して「世界のこの問題はどのようなのですか。あの悪い人たちの罪はどのようなのですか」などといった一般的な質問や言い訳を申し立てることがあります。もちろん、神はそうしたことにもお答えくださるのですが、神は、もっと、わたしたちひとりひとりに心をかけておられます。神は「世界の問題ではなく、“あなた”の本当の問題を聞きたい。他の人の罪ではなく、“あなた”の罪について論じたい」とおっしゃるのです。そのために、神はわたしたちに「ひとりになる」ことを求められるのです。

「ひとりで」神の前に出るのは、勇気のいることです。ヘブル4:12-13にこうあります。「神のことは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。」

確かに神の言葉は鋭い「刃物」です。しかし、それは、傷つけ、殺すための刃物ではなく、外科医が使う刃物のように、いやし、生かすための刃物です。「ひとりに」なって神と、神の言葉の前に立つ時、それはわたしたちをいやすものとなります。ヘブル人への手紙のこの箇所はこう結ばれています。「ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの

御座に近づこうではありませんか。」ヘブル 4:16 わたしたちは皆、神の御座の前に立たされます。それは、罪あるわたしたちには恐ろしいことです。しかし、その御座は、今、イエス・キリストによって「裁きの座」ではなく、「恵みの御座」となっています。神の御座が「恵みの御座」であるうちに、神の前に立ちたいと思います。

「ひとりになること」の第二の祝福は、神とのまじわりです。「ひとりになること」(solitude)と「ひとりぼっち」(loneliness)とは違います。実際、わたしたちは「ひとりになること」によって、孤独になるのではなく、神とふたりになるのです。神を「独占」し、神とふたりだけのまじわりを楽しむのです。セミナーや研修会では、多くの人が講師やリーダーと個人的な話をしたいというので、食事のときなど、競ってその隣に座ろうとします。それと同じように、神を「独占」したい、神とふたりきりでいたいという思いがあれば、「ひとりになる」訓練は容易いものです。また、逆に、「ひとりになる」訓練によって、神への熱い思いが育てられていくのです。

「ひとりになること」の第三の祝福は、それによってより良く人々に仕え、関わるができるということです。「ひとりになること」は、他の人との関わりをいったん置いて、ひとりで神のところに行くことです。「いったん置いて」いくだけであって、人との関わりを捨てるわけではありませんし、「人嫌い」になることでもありません。イエスは、誰にも邪魔されない朝に、寂しいところで、神とふたりきりの時を楽しみました。しかし、そこにとどまっておられませんでした。そこから立ち上がって、「ほかの、附近の町々にみんなで行って、そこでも教えを宣べ伝えよう」と言って、さらに多くの人々の必要に目を向け、人々に奉仕しようとされました。こうも言えます。イエス様は福音宣教と多くのみわざをなさって疲れたから一人静かな時を過ごされたというよりも、一人静かに父なる神様に祈り、交わりを持たれたからこそ他者のために多くの働きをすることが出来たのです。これは主日礼拝の持ち方においても一週間の最初の日曜日に神様を礼拝して残りの日々を過ごしていくのであって疲れたから休む時としての日曜とは考えていないのと同じことです。

今日は「ひとりであることの恵み」ということを聖書から学んできました。牧会学上で「不在のミニストリー」という言葉があります。字の通り、不在、共にいないことによっても人を支える働きが出来るといことです。私たちは物理的に遠く離れていてもお互いの関係を深めることが出来るのです。逆に側にいるろんなことを言うのだけれども近すぎて相手を冷静に見ることが出来なくなってしまい、結果的に親密さが保たれなくなることがあります。ウイルス感染防止のために三密を回避し、人との距離を取ることが求められています。確かに一見、コミュニケーション上大きな制約を受け、不利な面に心が行ってしまいます。しかし、それがマイナスではなくて、「共にいないこと」によって、日常生活を静かに振り返り、自分が神様から受けている恵みに改めて気づかされ、祈りが深められ、自分自身の姿を知ることによって人に対する思いも温かく優しいものになってゆくのではないのでしょうか。そして改めて、現在のよう一見、不自由そうな世界にも恵みと祝福があることを思わされるのです。

神は、ご自分の働きのために、「ひとりになる」ことができる人を求めておられます。教会の奉仕であっても、わたしたちは自分のしたことの成果やそれに対する人々の評価を気にすることがあります。しかし、神が求めておられるのは、そうしたものから目を離し、ただ神を慕い求めて働く人です。神とのまじわりのために、それ以外のものを進んで切り捨てることができる人が、ほんとうの意味で神と人々に仕えることができるのです。蛍池聖書教会がコロナ禍を通ることによってより教会が主の教会として成長出来るように祈りたいと思います。そしてみなで共に詩篇の作者が「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。」詩篇 119:71 と言ったように、主の恵みがこの時も満ちあふれていたと告白したいと思います。